南多摩納税貯蓄組合連合会会長賞

かげで支える「税」

多摩市立聖ヶ丘中学校
三学年　　岡村　琉輝斗

夏になると台風が来る、そしてそのニュースの天気予報よりも早く僕は台風が発生したことを知る。

その理由は妹の喘息だ。僕の妹はよく弟と間違えられるほど活発で、小学三年生から始めた野球は男の子ばかりのチームでも違和感がないほどだ。負けず嫌いな妹だが、生まれたときは低体重児という小さな赤ちゃんだった。

生まれてすぐにＮＩＣＵに入った妹に母は毎日凍らせたミルクを届けていたが、七月生まれだったため、すぐに溶けて心配だったとよく母が話していた。秋には退院したが初めて迎える冬に「喘息」を発症した。その後も入院と退院が続いていたので、家には病院で買った大きな吸入器や沢山の薬があった。僕にとってその日々は当たり前の生活の一部だったが、ある日、一ヶ月に一回の定期受診の時だ。母が「私の職場が変わったので、新しい保険証がまだないんです。」と言った。そしたら、「自費」になり、いつもとはくらべられない大金になり、慌てていた母を覚えてる。僕は「なぜ保険証がないだけでそんなに大金になるのか」が疑問でしらべてみた。そしたら、日本には国民皆保険というのがあり、国民すべてが公的医療保険に加入することにより定められた負担割合で医療をうけることができることをしった。

あの時の大金は、本来支払う医療費であり、いつもは見えていないその費用は税金からまかなわれていたのだ。また、他国は自己負担の国も多い。つまり誰もが平等に医療を受けれることは決して当たり前ではないのだ。さらに、医療保険制度のおかげで、安価でレベルの高い医療が受けれるメリットもあることをしった。

税金というと、僕たちでも支払う消費税をはじめ、支払うときに目に見え、その額が高いと、不満がつもるかもしれない。しかし、その税金は僕たちの生活をかげで支えてくれている。それは今後もずっと支えてくれると思う。だから、僕は、目に見えず支えてくれている「税」についてもっとしっていきたいと思った。